

[社 会]

社会科学習導入期で、社会的な見方・考え方を育成し、 社会参画につなげる指導の工夫

—小学校3学年「店ではたらく人 ～スーパー、道の駅あらい、水木しげるロード～」の実践—

小林 朋広*

1 問題の所在

学習指導要領小学校社会科の目標の「社会生活についての理解」とは、「人々が相互なかかわりをもちながら生活を営んでいることを理解するとともに、自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献しようとする態度を育てることを目指すもの」と解説に記されている。学習で取り上げる社会事象をただ単に知識として理解するのではなく、地域社会の貢献のために習得した知識を生かそうとする態度を育てていくことが必要だ。そして、将来、平和で民主的な国家・社会の形成者として自ら社会参画できる素地をつくっていかねばならない。

今谷¹⁾は、地域学習の中で、体験を通して知識・技能と判断・行動を相互関連的に形成することの大切さを提唱している。社会に積極的に働きかけていくことのできる学びが豊かな人間形成や自己実現を促すことも述べている。小学校3学年は社会科学習導入期である。導入期から、子どもたちに積極的に地域社会に働きかけたり、体験したりしなから社会科の学習を展開することが重要と考える。このような学習の積み重ねで、子どもたちは学んだことを地域社会の中で実際に生かそうとし、社会科の毎時間の学習を大切にできるようになるからである。

学んだことを地域社会で生かそうする姿勢を育てるために、直接学んだことを実体験で活用する活用型学習の実践が多く行われている。北²⁾は、活用型学習に入る前に、活用に値する知識を明確にしておくこと、さらに、その知識を調べる、考える、表すといった児童の学びから習得させたい知識に気付かせていくことの大切さを述べている。しっかりとした知識なしに、単に興味本位のみで体験などの活用に生かすのでは、公民的なほとんど資質は育たない。

この際、習得する知識を単に暗記させるのではなく、社会的な見方や考え方を育てながら知識を習得していくことが重要である。社会的見方や考え方について、中央教育審議会答申（平成20年1月）では、「社会的な見方や考え方を育成することを意識した授業が展開されていくと、生徒は他の社会的事象に対しても社会的な見方や考え方を応用転移させ、事実の関連に気付いたり、事象の成立要因を見出したりできるようになる。」と示している。また、居木³⁾は、共生を目指す社会的な見方や考え方を、次のように定義した。①社会を自分も含めた様々な関係の中で捉えるとともに、社会の問題を自分の問題として捉える姿勢をもつ見方・考え方、②自己の観点を自覚する事によって自己の社会像を絶対視せず、時に応じて自分の観点を再吟味し、社会を捉え直す姿勢をもつ見方・考え方、③他者の捉えた社会像の観点を推し量り、共感的に捉える姿勢をもつが、どんなに共感できても絶対視しない見方・考え方、④社会のシステムを共生を可能にするシステムと捉え、そのようになっていないシステムを共生システムに変えていこうという姿勢をもつ見方・考え方である。居木は、社会的な見方・考え方を育てるため、中学校で実践している。

中学校や小学校高学年だけでなく、社会科学習導入期においても、きちんとした社会的な見方や考え方ができるようにしていかなければならない。社会科学習導入期において、身に付けさせたい社会的な見方や考え方は、「平和で民主的な国や地域社会づくりのために、人々が相互によりよいかかわりをもって生活を営むことができる社会をつくること」である。前述の居木の示す社会的な見方・考え方定義をもとに考え、導入期では次のような子ども像を目指すことが必要ととらえた。

- 地域社会の社会事象や社会事象にかかわる問題を人ごとでなく、自分たちのこととしてとらえる。
- 自分のもつ社会事象に対する考え方を調査や話し合い、体験活動によって見つめ直したり考え直したりする。
- 今ある現状の社会事象や他者の考え方に対し、自分なりの考えを伝えたり、改善しようとしたりする。
- 自分のことだけでなく、社会の様々な人の立場に立って考えたり、みんなが協力して共に生きることを考えたりする。

このような姿勢をもつ社会的な見方や考え方ができるようにし、社会の学びの意義を明確に理解させ、社会科学習に対する意欲や社会参画意欲を高めていくために、本研究を行うことを試みた。

* 妙高市立斐太南小学校

2 研究の目的と方法

今回の研究では、次のような目的をもって追究し、その成果と課題を明らかにし、学習指導要領の趣旨の実現を図る。

社会科学学習導入期で、社会的な見方や考え方を育成し、自らの社会参画につなげていくための効果的な指導法を追究する。

社会科学学習導入期となる小学校の子どもたちには、1章で述べたような姿勢をもつ社会的な見方や考え方を育成していく。さらに、公民的資質を養うために、自ら社会参画できる素地を社会科学学習導入期から育てていく。導入期の「社会参画」のとらえとしては、「社会科の学びが自分たちの生活に結びついていること、人々の働きで社会事象が変わることに気づき、社会にかかわる」ことと考え、実践に取り組む。自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献しようとするためには、小さな頃からの積み重ねが大切である。以上のような理由から、上記のような自らの研究テーマを設けた。

研究テーマに向けて、次のような手立てを講じる。そして、その有効性を明らかにする。

- ① 学んだことを自らの販売活動に生かすことを目標にして追究させる。(活用型の学習、問題解決的な学習)
- ② 実際に見たり、聞いたりして調べる現地調査やビデオ写真等の視聴覚教材の提示を行う。
- ③ 異なる形態の商店や他地域との店と比較しながら考えさせる。
- ④ 販売活動の工夫や販売の際に大切にしたいことをグループや全体で話し合う活動を取り入れる。
- ⑤ 総合的な学習の時間や子どもたちにとって身近なものを学習や体験に取り入れる。

また、次のような方法で、指導の工夫や手立ての有効性や課題を実証する。

①単元での児童の意欲や態度の変容 ②児童の学習シート、ノート、短冊、提案書に記載された内容やの話し合いの発言

3 実践

(1) 単元名 「店ではたらく人 ～スーパー、道の駅あらい、水木しげるロード～」

(2) 単元の目標

- ◎ 販売の仕事の工夫と自分たちの生活や地域とのかかわりや販売の仕事の活性化の方法を考えようとする。
- 地域には販売に携わる仕事があり自分たちの生活を支えていることや仕事の特徴や地域等とのかかわりを理解する。
- 課題に対して、進んで調べようとしている。
- 地域の販売の仕事の様子から学習課題を見出し、見学・調査したり、話し合ったりしたことを適切に表現している。

(3) 単元設定の意図

地域の販売に携わる仕事と私たちの消費生活は、直接結び付いている。子どもたちは、2年生の生活科で新井六斎市に行って買い物をしたり、休みの日に家族で地域のスーパー等に行ったりしている。販売の仕事を見たり、消費者の立場に立ったりしているので、学習に対する興味や意欲の高まりが期待できる。

校区には、小さな商店が数軒、コンビニエンスストア、「道の駅あらい」がある。「道の駅あらい」は全国売上最高位の道の駅である。しかし、車で的高速道路や国道の利用客をターゲットにしていることもあり、地域住民の利用度は比較的低い。日常の買い物では、新井小学校区にあるスーパーなどを利用する家庭が圧倒的に多い。

単元の中では、利用度の高い「イチコスーパー」と校区にある「道の駅あらい」を見学・調査する。調査では、対象が身近であるため実際に見たり聞いたりしながら追究を高めることができる。また、授業者が実際に巡検で取材した鳥取県境港市の「水木しげるロード」を取扱う。3つの形態の違う商店を取り扱い比較することで、商店ではたらく人の考え方に気づき、それぞれの店の工夫や課題も学習でき、社会的な見方・考え方を育成できる。例えば「イチコスーパー」では食品の新鮮さやおいしさを売り物にしている。「道の駅あらい」では地域の情報発信の場、地域の特産品の販売、地域のイベントの場としての役割を果たしている。「水木しげるロード」は、シャッター街を観光客でいっぱいにしたことで全国的に知られている。地域の活性化を目指し、子どもが喜ぶような商品展示方法や遊びの場を提供する等の工夫が見られる。そのような販売に対する工夫やはたらく人の考え方に気付かせ、社会的な見方・考え方を育成していきたい。

さらに、本単元では他教科や総合と関連させながら、消費活動や販売活動等、地域社会に直接参画する体験を行う。単元の最終目標に、校区にある「道の駅あらい」で、子どもたちが販売活動をしたり、店に販売の工夫を提案したりすることを掲げて、学習を展開する。見学等で学んだ店の工夫やはたらく人の考え方を生かして、自分たちの実践の場につなげることで、社会的な見方や考え方をさらに広げたり、深めたりすることができる。さらに、学んだことを地域社会で活用する学習を通して、自分たちの学びを社会の改善に生かせるといったことに気付かせ、今後の社会参画意欲を高める効果が期待できる。

(4) 指導と評価の計画 (全15時間)

時間	◎ねらい	○学習内容	・学習活動	○評価規準	・評価方法
第一次 つかむ 第4時	◎自分たちの生活と店とのかかわりについて考え、学習課題をもつことができる。	○利用する店についての調査。 ・地域にどんな店があるのか出し合う。写真を見る。 ・日ごろ、どんな店で買い物をするのか話し合う。 ・家の人の店の利用についての質問カードを作る。 ・家の人に聞き取り調査を行い、カードに書く。 ・質問カードにまとめる。 ・話し合ったことを白地図にまとめる。 ・学級の家の人のお客の実態についてまとめる。 ○「お店ではたらく人」の学習課題 ・疑問に思ったことや調べたい課題を話し合う。		○地域の人々の販売の仕事の様子に関心を持ち、意欲的に調べようとしている。 【関①】 ・話し合い ○地域には販売に関する様々な種類の店があり、私たちの生活を支えていることを理解している。 【知①】 ・カード ・発言	
		問題	① スーパーマーケットがよく利用されているけれど、どうしてかな。 ② 道の駅あらい売上全国第1位になったけれど、もっと地域のお客さんをふやすにはどうすればいいかな。 ③ 私たちも買い物体験、店の体験をしてみたい。		
			・商店の見学計画を立てる。見ること聞くことを決める。 ①イチコスーパー ②道の駅あらい	○自ら課題を持ち、進んで問題解決を図ろうとしている。 【関②】 ・話し合い ・ノート	
第一次 調べる 第5時	◎店ではたらく人は、どんな仕事をして、どのような工夫をしているのか調べる。	○イチコスーパーの見学 ・見学計画をもとにスーパーマーケットを見学し、売り場の工夫について調べる。 ・スーパーマーケットで働く人にインタビューをし、働く人の工夫について調べる。 ・スーパーマーケットの品物の産地を調べ、他地域とのつながりについて知る。 ・お客さんにインタビューし、お客さんが店に求めていることを調べる。 ・店で行われている環境を守るための取組や地域の人々が利用しやすい取組について調べる。 ○道の駅あらいの見学 ・見学計画をもとに道の駅あらいを見学し、店や駐車場の工夫について調べる。 ・市役所の方や店「ひだなん」の店長さんに聞き取り調査を行う。 ・お客さんにインタビューし、お客さんが店に求めていることを調べる。		○自ら課題を持ち、進んで問題解決を図ろうとしている。 【関②】 ・調査の態度 ○観点に基づいて見学したり資料を活用したりして、地域の人々の仕事の様子について必要な情報を集めて正しく聞き取ったり読み取ったりしている。 【技①】 ・しおりの表現 ・聞き取り調査の様子 ○自ら課題を持ち、進んで問題解決を図ろうとしている。 【関②】 ・調査の態度 ○観点に基づいて見学したり資料を活用したりして、地域の人々の仕事の様子について必要な情報を集めて正しく聞き取ったり読み取ったりしている。 【技①】 ・しおりの表現 ・聞き取り調査の様子	
第三次 まとめる 第2時	◎様々な形態の店の工夫について話し合い、まとめて、理解する。	○それぞれの店の工夫 ・イチコスーパーではどんな工夫をしていたか話し合う。 ・道の駅あらいでは、どんな工夫をしていたか話し合う。 ・新井商店街では、どんな工夫をしていたか話し合う。 ○なぜスーパーマーケットがよく利用されるようになったか。 ・工夫をシートにまとめる。 ・工夫を話し合う。 ○道の駅あらいがなぜ売上1位になった理由。 ・工夫をシートにまとめる。 ・工夫を話し合う。		○集客のための工夫について考えている。 【思②】 話し合い・シート ○商店の品物に対する品質保全や流通の工夫について考えている。【思③】 ○商店の環境保全や地域貢献につなげ、今後どんな取組が必要か考えている。【思④】 ○分かったことを発見カードやシートなどに適切に表現している。【技②】	
第四次 いかす 第4時	◎地域の店の活性化について考え、提案したり、参画したりする。〈活用型学習〉	○道の駅あらいにもっとたくさんのお客を呼ぶ方法 ・自分の考えをノートに書く。 ・シャッター街が客でいっぱいになった「水木しげるロード」の映像と写真を見る。 ・たくさんのお客を呼ぶにはどうすればよいか、「水木しげるロード」の取組をもとに話し合う。 ・提案書と新聞を書いて市役所や商店に届ける。 ・自分たちも取組に参画する。 ↓ 「ひだなん」に青空市場出店		○商店の環境保全や地域貢献につなげ、今後どんな取組が必要か考えている。【思④】 ○地域の販売に関する仕事に見られる特色や地域などのかかわりを理解している。【知③】 ○集客や商品の品質保持に向けた様々な工夫を理解している。【知②】 テスト ○学んだことについて相手意識をもって分かりやすく新聞に表現している。【技③】 ○商店に対して、自分たちなりに考えたことを適切に表現し、提案している。【思⑤】	

(5) 授業の実際

① 課題作り

最初に、子どもたちがどこでよく買い物をするのかを出し合った。次に、子どもたちは、家の人がどんな店を利用し、なぜその店に行くのかアンケートを作り、調査を行った。調査の結果を話し合っている際に、次のような課題が出された。

C：やっぱり、スーパーに行く人が多い。いろいろな種類の食べ物があるからだ。他にも工夫があるのか調べたい。

C：ほくたちも買い物をしたい。できたら、売ることもしてみたい。

C：道の駅あらいは、全国売上No.1だけれど、ほくたちの家ではあまり行っていない。地域のお客さんが増えるといいな。

イチコスーパーと道の駅あらいを見学し、道の駅で学級で育てたジャガイモを販売することを子どもたちに伝える。子どもたちの見学・販売したいという願いを実現させ、学んだことを生かし活用型学習を展開させる意図があった。子どもたちは、販売体験に強い意欲を見せ、販売成功のためにも、見学する店で工夫を見つけようと、見学計画で多くの質問内容を考えた。

② 「イチコスーパー」、「道の駅あらい」見学・調査、店の工夫についての話し合い

二つの店の見学・調査では、どの子どももしおりにびっしりと見つけた工夫を書いていった。積極的にお客さんや店の人にインタビューをし、さらに自ら買い物体験をして確かめた。見学後、見つけた工夫を短冊に書いて貼り出した。(写真1)。

C：イチコスーパーではまとめ買いをすると安くなったから、ついたくさん買ってしまいました。

C：新鮮でおいしいものを売るため、近くから仕入れていました。生産者の名前も書いてありました。

C：イチコでは、エコバックがあったり、ポイントもあったりしたので、また行ってみたいになりました。

C：道の駅あらいは、物売るだけでなく、イベントや地域の情報発信の場にもなっているそうです。

C：道の駅あらいの店では、料理のレシピや売っているものの説明も書いて、買いやすかったです。

短冊に書かれた工夫を似たような意見ごとにまとめ、さらに見学の写真を見て工夫を確認した。その中で、子どもたちは、自分が気付かなかった工夫に気付いていった。次に、子どもたちは短冊を見ながら店の人が大切にしていることを話し合った。

C：お客さんに喜んでもらい、たくさん売れるように、お客さんの立場に立ちたい。

C：お年寄り、小さい子ども、目が不自由な人にも、やさしくしたい。くつろげる場所、楽しい場所にしたい。

C：新鮮なものおいしいものをお客さんに届けたい。

C：地域の良さをアピールしたい。地域のイベントもしたい。環境を大切にしたい。

この話し合いを通して出されたはたらく人が大切にしていることを、自分たちの販売活動でも大切にすることを確認した。

③ 「水木しげるロード」の学習・販売活動〈活用型学習〉

授業者が調査した「水木しげるロード」の写真とビデオを見せた(写真2)。「イチコスーパー」「道の駅あらい」にはない工夫に気付かせたかったからである。特に、子どもたちが喜ぶような工夫や地元の特色をテーマにした工夫である。シートに工夫を書いた

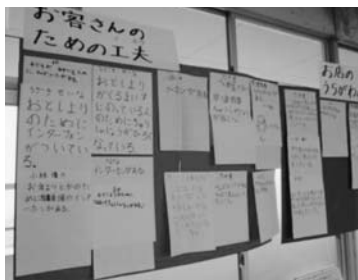


写真1 店の工夫を短冊に



写真2 水木しげるロードの店



写真3 販売用ジャガイモ袋詰め



写真4 スタンプラリー準備

道の駅の店にいてあん	
たくさんのお客さんに来てもらうために提案します。	
①	遊ぶ所を作るといいと思います。
②	しゅんの物をたくさん売るといいと思います。
③	ぞうを作るといいと思います。
④	おまけをつけるといいと思います。
⑤	アヒール(かく店チラシをくはる)といいと思います。
⑥	道を分けたほうかいいと思います。(ホテル方面に行くとき、ひだなん方面に行く人を分ける)
⑦	ぼうえんまふうを作るといいと思います。妙高山、米山、とかを見るコーナを作るといいと思います。
⑧	花で文字を作るといいと思います。(れい)ようこそ道の駅へ
⑨	しよくを作るといいと思います。
⑩	パンフレットに 裾野山のきれいな所とかをあげればいいんじゃないでしょうか。
ぜひおねがいします。	
斐太南小学校 3年	

図1 道の駅への提案書

後、販売活動を行う道の駅の店をもっとお客さんに喜ぶ店にするために生かせる工夫をグループで話し合った。

C：子どもが楽しめる遊びコーナーを、ほくたちも作ろう。前にやった消しゴムはんこ作りやプラバン体験コーナーがいい。

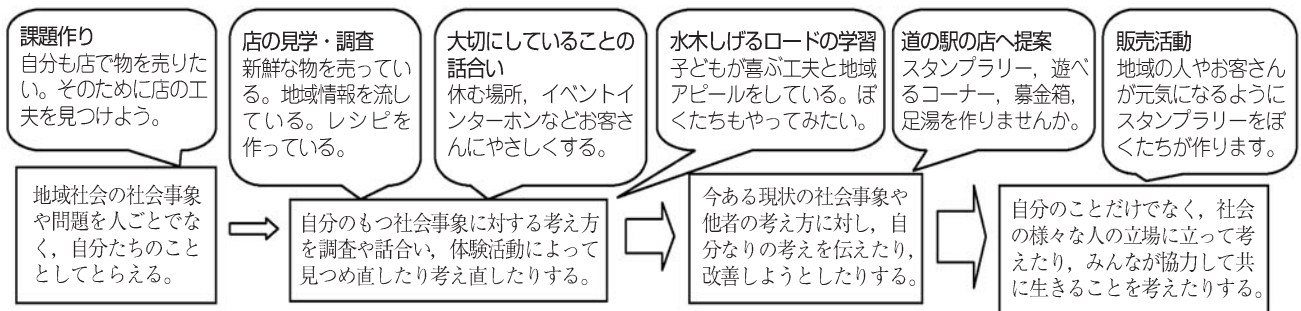
C：道の駅全体で、水木しげるロードのようなスタンプラリーをしよう。ほくたちの店にも来てもらえるよ。

C：「ゲゲゲの鬼太郎」のような地域のシンボル（ミョーコーさんなど）をおいたら、地域の宣伝になるよ。

C：学校の「大桜新聞」や総合で育てたスズムシにおいて、学校のことも伝えたいな。

小さな子どもたちが喜ぶような工夫や地元の特色をテーマにした工夫を取り入れた意見が多く出された。その後、道の駅あらいの店で行う自分たちの販売活動で取り入れることを決め、チラシ、レシピ、スタンプラリー、遊びコーナーの準備を行い、販売活動につながった。また、同時に道の駅あらいに、今後の販売の工夫としての提案書を各自で書いて送った（図1）。

単元を通して、児童A男のシート等の記載や発言から、社会的な見方・考え方に次のような広がり、深まりが見られた。



4 考察

今回の研究目的であった「社会科学習導入期で、社会的な見方や考え方を育成し、自らの社会参画につなげていくための効果的な指導法を追究する」について、次のように成果が明らかになった。

(1) 学んだことを自らの販売活動に生かすことを目標にして追究させる。(活用型の学習、問題解決的な学習)

課題設定の場面で、道の駅あらいで販売活動を行うことを決めた。「お客さんがたくさん来て、喜んでもらえる店にしたい」という願いをもち、そのための調査や話合いができた。店の工夫については、家族アンケート後の課題作りの時、二つの店の見学計画作りの時、見学の際、見学後の話合い、さらに自分たちの販売活動に生かすためと、繰り返し話し合った。その中で様々な工夫にふれ、多角的に社会事象を繰り返し見つめた。出店につなげることで、地域社会の社会事象や問題を人ごとでなく、自分たちのこととしてとらえる姿勢をもつ社会的な見方、考え方ができるようになり、社会参画意欲も高まった。

(2) 実際に見たり、聞いたりして調べる現地調査やビデオ写真等の視聴覚教材の提示を行う。

スーパー、道の駅では、実際に見て、予想していた工夫を確かめたり、店の人に工夫を聞いたりすることができた。また、家族だけでなく、買い物客にインタビューをしてなぜ、この店に来るのかを確かめた。実際の声を聞くことで、店に対する様々な願いや客に喜んでもらえる様々な工夫に気付くことができた。さらに、実際に見ることで見ることができない店の工夫は、写真やビデオ教材を用い、販売や客に対する工夫に気付かせることができた。特に、ビデオでは、店で教師が実際に買い物する場面を見せ、店主の思いも聞くことができたので、店が集客のために行っている考えに気付かせることにつながった。

(3) 異なる形態の商店や他地域との店と比較しながら考えさせる。

今回は、見学では「イチコスーパー」と「道の駅あらい」、そして「水木しげるロード」の商店街の三つを比較した。タイプの異なる店を比較することで、店の人が何を大切にしているのかを考えたり、様々な社会的な価値に気付かせたりすることができた。自分たちの店に生かす際、魅力いっぱいの水木しげるロードを真似ではなく、道の駅で可能な工夫に変えて考える場面も見られた。自分のもつ社会事象に対する考え方を調査や話合い、体験活動によって見つめ直したり考え直したりする姿勢をもつ社会的な見方や考え方ができるようになった。

(4) 販売活動の工夫や販売の際に大切にしたいことをグループや全体で話し合う活動を取り入れる。

二つの店の見学調査で明らかにした店の工夫を短冊に表現した。その後、店の人が大切にしていることを話し合った。「新鮮で良質な商品を届けたい」「お年寄りなど子ども、体の不自由な人に喜んでほしい」「地域の情報を伝えたい」など、大切にしたいことを話し合う中で、平和で元気な地域社会になることや、人と人がよいかかわりを保てることを、店で働く人も願って販売の仕事をしているといった社会的な見方や考え方ができるようになっていった。さらに、自分たちの出店の際も、この話合いで出てきた店の人

が大切にすることをもとに、子どもたちはアイデアを出し、社会的な見方や考え方がさらに確実になり、深まったととらえることができる。

(5) 「総合」や子どもたちにとって身近なものを学習や体験に取り入れる。

学年で栽培したジャガイモや「総合」や学級活動で作った消しゴムはんこやブラバンなども体験できる店を開いて、客に喜んでもらうなど、今までの学習・体験と関連付けて、地域の良さをアピールしようとする考え方ができるようになった。自分たちの店に生かすだけでなく、道の駅あらいに自分たちが考えた工夫を提案できた。今ある現状の社会事象や他者の考え方に対し、自分なりの考えを伝えたり、改善しようとしたりする姿勢をもつ社会的な見方・考え方ができるようになった。

上記の5つの成果をまとめると、社会的な見方や考え方は、単元全体において深まり、確実なものになっていったことが分かる(図2)。店の工夫を調べ、店で働く人が何を大切に話を話し合い、自分たちの販売体験や店への提案に生かすことで、社会的な見方や考え方は、地域や人とのかかわりを大切にしていこうとするものになっていった。自分のことだけでなく、社会の様々な人の立場に立って考えたり、みんなが協力して共に生きることを考えたりする姿勢をもつ見方・考え方ができた。

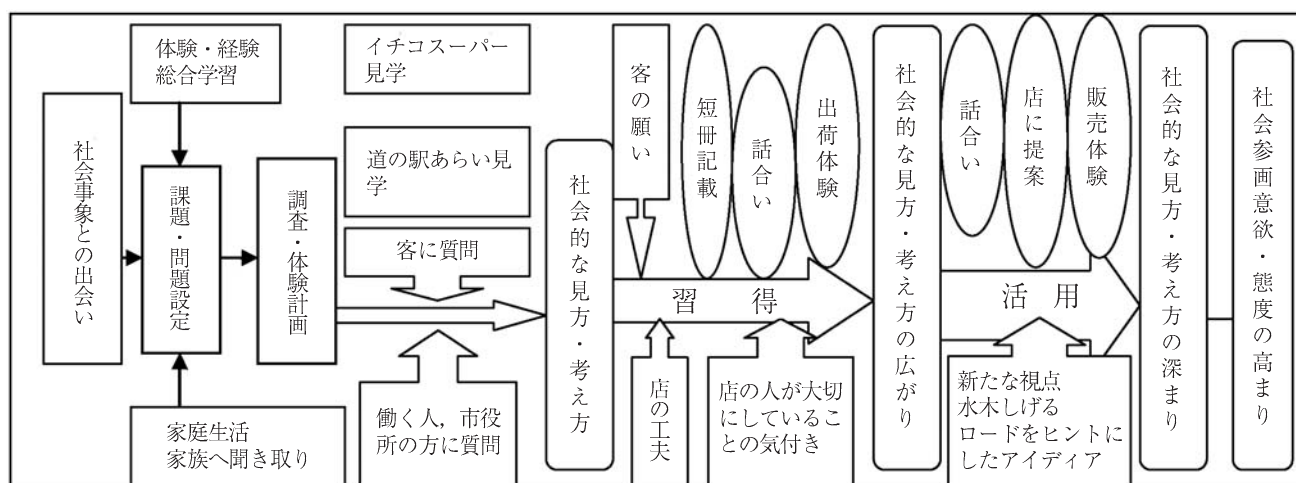


図2 社会的な見方・考え方を育成し、社会参画につなげる概念図

5 研究の成果と今後の課題

子どもたちが店ではたらく人の工夫を調査し、さらなる工夫を考え、自分たちの販売に生かしたり、店に対して提案したりすることを通して、販売者の立場に立った社会的な見方や考え方が徐々にできるようになってきた。学んだことを話し合ったり、活用したりすることで、社会的な見方や考え方は、より深まっていった。店のミニ体験ではあるが、自分たちなりに社会参画につなげていこうとする意欲も高まってきた。学んだことを生かし、さらに課題が出てきたら学びに戻るというサイクルができ、社会科学習の大切さを再認識できたことは成果である。

販売体験は、今後3月まで続く。その中で、社会参画意欲や学びの意欲をさらに向上できるよう、社会科だけでなく、総合的な学習の時間や他教科と関連させ、継続指導することが必要である。また、このような活用型学習や問題解決的な学習を社会科の他の単元でも行っていかなければ、学ぶことの意義が薄れることが懸念される。多少でもいいので、今回のような活用型学習、問題解決学習を展開させ、さらなる社会的見方・考え方、そして社会に生かそうとする意欲を培いたい。

注及び引用・参考文献

- 1) 今谷順重「地域学習の優れた学習指導案とその要件」全国社会科教育学会『社会科教育論叢 第46集』, 2007, 2
- 2) 北 俊夫「知識概念・技能の習得活用を図る年間計画・単元構成のヒント」明治図書『社会科教育No.634』, 2012, 64-67
- 3) 居木 正「社会的な見方・考え方を育てる授業のあり方ー「見えるモノ」から「見えないもの」のつながりへー」, 神奈川県立教育センター『研究集録18』, 1999, 29-32